

日本におけるタタール人コミュニティ—1920～1950年代の東京を中心に—

The Tatar Community in Japan
Focusing on Tokyo from the 1920s to the 1950s

沼田 彩誉子 (Sayoko Numata) 指導：店田 廣文

戦前日本に存在したタタール人コミュニティとは、どのようなコミュニティであり、どのように形成されたのか。これまで十分に顧みられてこなかったタタール人コミュニティそのものについて、具体的な検討を行うことが、本論文の目的である。

1917年のロシア革命を逃れ日本へと移住したタタール人が対象である。彼らは先行研究において、戦前日本の回教政策の枠組みの中で語られることが多い。このとき、移民としてのタタール人の移住過程を追うという作業には、多くの課題が残されている。特に彼らのコミュニティについて、十分な検討がなされていない。移民特有のニーズに基づく制度が発達した社会空間、すなわち移民コミュニティとしてタタール人コミュニティをとらえ、1920～1950年代の東京を中心にその形成を追った。聞き取り及び史料調査の結果、タタール人コミュニティのめまぐるしい変化がみえてきた。

1章では、タタール人の極東への移住を概説したのち、1921年から30年代前半にかけて、クルバンガリーへの指導による学校、印刷所、礼拝所といった制度の供給と、コミュニティの形成を追う。クルバンガリーの来日と東京回教団の結成によって、東京にはタタール人コミュニティが形成され始めた。制度供給に必要な資金は、タタール人自身の寄付で賄い切れるものではなく、クルバンガリーが日本人の支援者から引き出したものだった。

2章では、イスハキーが来日した1933年から、1938年のモスク落成以前の期間を対象とする。クルバンガリー派とイスハキー派の対立によるコミュニティの分裂を扱う。1931年の東京回教学校設立をもって、「移民コミュニティ」としてのタタール人コミュニティは成立した。しかし、イスハキーがイデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会を設立すると、バイラムや子どもたちの教育は、別々に行われるようになり、コミュニティは分裂してしまった。イスハキー離日後も対立は続いたが、東京ではクルバンガリーの影響力が強かった。

3章では、日本の干渉によってタタール人の強引な統合が図られた、1938年に焦点をあてる。クルバンガリーの国外退去と日本による組織の設立、統合下の問題、日本の宣伝活動におけるタタール人の利用を扱う。回教政策の重要

性が認識されると、国内の「回教徒」たるタタール人への注目も高まった。このことは、モスク建設にかかる多額の資金援助と同時に、日本による「回教徒の統合」という干渉を生み出した。クルバンガリー派とイスハキー派を統合するため、クルバンガリーは追放された。東京回教団と文化協会は解消され、東京イスラム教団に統合された。しかし内部では対立が続いた。さらに日本は、タタール人を日本とイスラームの友好を示す宣伝材料として利用した。

4章では、1930年代後半から1945年の終戦までを対象とする。東京におけるタタール人の人数、居住地、職業、教育といった視点から、コミュニティ内部での、より具体的な生活の様子や、制度との関わりをみる。その上で、「統合」後のコミュニティの変化をみていく。両派の激しい対立は、表面的には、徐々に影をひそめた。主軸となるクルバンガリー、イスハキーがともに不在となったこと、戦時下の生活環境の悪化という切実な問題に直面したことなどが、起因した。戦局の悪化に伴い、タタール人にも強制疎開の措置がとられると、東京のタタール人コミュニティは著しく縮小した。

5章では、1945年の終戦から、1950年代後半までを対象とする。戦後の生活の立て直しと、トルコ国籍取得によるコミュニティの縮小を扱う。46年頃には東京回教学校の授業が再開されるなど、タタール人コミュニティは再形成の兆しをみせた。しかし、トルコ国籍が付与されると、彼らのほとんどはトルコやアメリカへと再移住した。1960年代初頭の東京トルコ人学校（旧東京回教学校）閉校は、移民コミュニティとして戦前に形成されたタタール人コミュニティが、役割を終えたことを意味していた。